

まちのカルチャー人たち⑤

もっとフレンドリーに
なりましょう!!

アンマリ・ステフェスさん
タウンウォッチャー
文・早川 和佳子



「あちらでは夜、まだ時差ボケでしんどい」と話しながら、真っ赤な素敵なジャケットのステフェス先生が教員控室へ入ってこられました。数日前に、故郷のアメリカ・ミネソタ州から帰ってこられたばかり。知的な薄いブルーの眼のスマートな先生。モダンで清潔な樟蔭女子短期大学の雰囲気は溶け込んで見えました。

「もし、生き返ることがあるならば、私、多分、前の人生は日本人だったと思う」と言われる先生。コロラド州の大学の夏期講座で茶道コースを取ったのがきっかけで日本に来られました。京都の裏千家で六年間お茶の勉強、お茶室の掛け軸を拝見する必要から漢字や万葉がなの習字を二〜三年勉強。京都で英会話を教えているとき聞こえた琴の音に魅せられて、お琴と三味線を〇年位習って先生の資格まで持っておられます。その上に空手、指圧まで習われた日本文

化通。でも「私は、エーと、何っという三日坊主…三年坊主。やるときは熱心に勉強するけど、興味がなくなったらセンゼンやらなくなる」。今では琴や習字はされていないそうです。

一九八七年に、この大学の先生になられて一年間は京都に住んでおられたのですが、通うのが大変なので「買い物など少し不便だけど、何よりも空気がきれいだし、景色もいい」香芝に越して来られ

ました。お一人暮らしです。日本人々は、自分のことばかり考えているが、もっとフレンドリーになつて欲しい」。

女子学生の就職難について聞くと、「男性社会に頼らず、自分のビジネスを開いたほうがいいと思う。社会の必要性と自分のタレントを考えて…例えば、高齢化社会になつて、老人施設の少ない日本では近隣の専門家のケアワークがニユービジネスになります」。英語まじりのお話を聞くうちに、女性としての凛とした生き方が伝わってきます。

フィリピンや中国の学生の学費や生活支援もされている先生は、日本の学生に自分のことだけを考えず、もっと、世界中の苦しんでいる人たちに目を向けて欲しいそうです。

「海外ドキュメンタリー番組を見たり、現地に行つて、人類のために自分に何ができるか考えて欲しい。日本の円が強いので、今が時期だ。小さなお金でも沢山の人が助かる」と言葉を選びながら話してくださいました。

お花が綺麗な中庭でお別れをしました。出会った学生に「もう一年勉強する？」と声を掛けられた時の、やさしい笑顔がとても印象的でした。